水俣学通信

第 55 号
2019.2.1

Newsletter from the Open Research Center for Minamata Studies

水俣今昔シリーズ10　水俣川の川尻（水俣市八幡町）（1960年頃と2014年）

目　次

論説：
「史料でみる近世の水俣―舟津村の位置づけをめぐって―」…… 2
矢野治世美

報告：
「第３回『環境被害に関する国際フォーラム―水俣病・失敗の経験を将来に活かす』の準備が進む」…… 3
中地重晴

「水俣学講義　一人芝居『天の魚』」…… 4
川島宏知

「第15期公開講座『負の歴史をどう語り継ぐのか～次世代による負の遺産の伝承とは～』を開催」…… 5
井上ゆかり

「不知火海を船で巡る：多様な漁村と漁業」…… 6
花田昌宣

「新潟大学水俣研修―学生が見た水俣―」…… 7
渡邉　登

今後の予定・水俣学研究センター日録…… 8

熊本学園大学水俣学研究センター

《論 説》

史料でみる近世の水俣
―舟津村の位置づけをめぐって―

熊本学園大学社会福祉学部
（水俣学研究センター研究員）　矢 野 治世美

水俣病をめぐる差別の背景には何があるのか。不知火海総合学術調査団の団長を務めた色川大吉氏は、水俣には陣内―浜―丸島―舟津という序列があり、その序列に基づく差別構造は「江戸時代における身分差別の支配構造をひきついだ近代天皇制の抑圧と救済のシステムと、適合している」と指摘した（色川大吉「不知火海民衆史」）。同氏は『水俣――その差別と風土の歴史』において、舟津をつぎのように位置づけている。

> *ところがそれが海沿いに来ますと、下層民視されてくる。なかでも舟津という地区がありますが、ここへいますと旧被差別部落も同然です。舟津もんとか舟津衆と言われて、どこから流れてきたか、えたいの知れない流れもんだという扱いを受けるわけです。*

このような色川氏の見解については、拙稿（「研究ノート　史料でみる近世の水俣――色川大吉「不知火海民衆史」への疑問から――」『部落解放研究くまもと』第76号、2018年10月）で、部落差別とも相まって差別が再生産されかねないことを提起するとともに、舟津について近世の史料から実態の解明を試みた。

昭和９（1934）年の水俣川改修工事以前、水俣川河口には三角洲が存在し、一帯は江戸時代には芦北郡水俣手永の浜村に属していた。舟津村は浜村に属する小村で、「漁師村」と称されることもあった。

寛永10（1633）年の「芦北郡人畜改帳」には、舟津村も含め浜村全体として「水夫（れうし・しほやき）」が66人いるという記載があり、舟津村分として24世帯、145人（男85人・女60人）が登録されている。

「人畜改帳」をもとに本村の浜村と比較すると、舟津村の家々は、①名子・作子（本百姓に隷属した零細農民）の不在　②牛馬を所有していない　③屋敷地が狭く、家数が少ない　④本屋の間口・奥行きが狭い　⑤戸主の弟が同居している家が多い、という特徴がみられる。

浜村の屋敷地の面積は平均４畝13歩、家屋の面積は平均21.4歩で、舟津村は屋敷地が１畝１歩、家屋が9.3歩であるから、たしかに舟津村の屋敷地や家屋は本村と比べて狭小である。収穫した穀物の脱穀・精製を行うための「こなし屋」も、舟津村で所有しているのは１軒のみである。名子・作子の人数や牛馬数は、その家の農業経営規模や経済状況と比例するといえようが、このような傾向をもって、ただちに江戸時代の舟津村が「極貧」であったとみなすことはできない。舟津村の住人は、漁師や塩焼きを主な生業としていたため、農作業を補うための労働力としての名子・作子や耕作用の牛馬、収穫作業用の「こなし屋」を必要としなかったと考えられるからである。

漁業とともに、浜村・舟津村を支えた産業が製塩である。浜村と丸島村との間にあった「馬刀潟」には江戸時代に塩浜（塩田）が築かれ、塩の専売化によって明治42（1909）年に製塩が中止されるまで一帯には塩焼き小屋があった。

寛政９（1797）年には馬刀潟の北側に新たに干拓地が造成され、さらに広範囲に塩浜が築かれた。寛政10（1798）年10月の「徳富茂十郎内分記録」によると、津奈木手永の村々の百姓が、馬刀潟の塩浜で日雇いの仕事をしていた。製塩は芦北・水俣の村々にとって貴重な現金収入として位置づけられていたのである。

享和３（1803）年ごろ、水俣手永の浜村漁師の利左衛門が馬刀潟の新塩浜の造成費用と、漁師村の下水普請のための夫賃として藩に献金した。その功績に対する褒賞として、利左衛門には「礼服・傘・小脇差」の着用が、家族には「傘・菅笠」が許可された。天保４（1833）年12月には、水俣手永浜村兵吉・漁師村亀八が、それぞれ銭200目、銭１貫目を献金し、兵吉には傘、亀八には麻裃・傘・小脇差が許可された（『町在』）。浜村の漁師や漁師村＝舟津村の住人のうちには、藩に対して経済的な功績をあげた人びともいたのであり、近代の聞き書きから江戸時代も貧しかったと推測するのは早計であろう。

筆者は、色川氏が聞き書きをもとに見出したような舟津に対する差別視と、それを生み出した差別構造は、江戸時代から引き継がれたものではなく、近代以降の地域構造や産業構造の変化によってもたらされたものではないかと考え、不十分ながら、近世史料にもとづいて舟津村の実態の解明を試みたのもこの理由による。

中世史研究者の網野善彦氏は、江戸時代以前の社会においては「百姓」は農民だけではなく、多様な生業を営む人びとを含んでいたが、支配者は「農本主義」的な志向を有しており、明治政府によって「百姓＝農民」が制度的に確立したとする（網野善彦『「日本」とは何か』）。近代の聞き書きの中にしばしば表れる舟津に対する差別のまなざしも、日本社会は歴史的に農業が主流であったという「思いこみ」が影響しているのではないかと考えている。この問題については稿を改めて論じたい。

《報 告》

第３回「環境被害に関する国際フォーラム―水俣病・失敗の経験を将来に活かす」の準備が進む

熊本学園大学社会福祉学部
（水俣学研究センター研究員）　中 地 重 晴

水俣学研究センターと国際フォーラムの開催経過

水俣病患者の発生が公式に確認されてから62年が経過した。水俣病事件は、広範な環境汚染を通じて重篤な患者が発生したこと、胎盤を通じて次世代にも重大な影響を与えたことなど人類が初めて経験したものであった。水俣地域や新潟では、今なお被害者達の傷が癒えておらず、被害に対する補償問題は全て解決したとはいえない現状がある。

熊本学園大学では、1999年に故原田正純先生を中心に水俣学研究プロジェクトを開始し、水俣病事件を様々な分野から多角的に捉え、水俣病の教訓を世界に発信し、未来にその教訓を残すような研究を行ってきた。2005年４月には大学内に水俣学研究センターを、同年８月には水俣現地に研究施設を開設し、調査・研究・教育活動を行ってきた。また、カナダ、タイ、韓国、台湾など公害被害発生地域の調査研究ならびに被害者との交流を実施してきた。

2006年に「水俣の教訓は活かされたか」という問いかけを国内外に発する国際フォーラムを開催した。その後、日本では東日本大震災と福島第一原発事故を経験した。国外でも公害発生、環境破壊は継続し、地域住民・被害者の運動が各地で続いている。

2013年に、長期継続的な国際交流と水俣学の国際発信を願って、第２回国際フォーラムを開催した。水俣学の理念と方法に則り、国境を超え、学問の分野を超え、専門家と市民の分断を超えた取り組みによって、水俣の負の遺産（失敗）を繰り返すことのないような世界を構築することをめざした。

第３回国際フォーラムの目的

今年度、第３回国際フォーラムの開催を企画した。今までの国際フォーラムと同様に、研究者だけで議論するのではなく、被害者やNGO/NPO支援者も交え、被害者の視点にたち、公平と正義に基づいた実践的な議論の場としていきたい。今回のテーマとして、①水俣病被害について、その教訓が日本国内のみならず世界において、どのように活かされたか、あるいは活かされなかったかどうかを検証する。②世界各地で進められている環境復元の取り組みについて経験の共有をはかり、現在の課題に関する相互理解を深める。③世界各地で起きている環境被害に関する共通認識を深め、水俣病の教訓を活かすためにどうすればよいのかを検証し、将来に向けて発信する。

海外招聘者の紹介

第３回国際フォーラムでは、カナダ、中国、韓国から被害者、研究者、NGO/NPO支援者を招聘し、議論していきたい。招聘者の取り組んでいる課題を簡単に紹介する。

カナダ水俣病事件は、ドライデン市にあったパルプ工場のクロロアルカリ工程で触媒として用いられた水銀が、イングリッシュ・ワビグーン川水系に廃棄され、有機化した水銀が食物連鎖を通し、グラッシー・ナロウズとヴァバシムーン２つの先住民居留地の住民が被害を受けた。原田正純らが1975年に調査し、水俣病の神経症状を持つ住民を多数認めた。カナダ独自の症状の点数制度に基づいた補償がなされているが、健康障害を抱えていても認められないケースも多く、社会問題となっている。水俣学研究センターでは過去３回調査に出かけている。最近、カナダ政府が底質の水銀汚染対策を検討し始めている。

中国、淮河の水質汚染事件は、1994年、中国の黄河と長江の間を流れる淮河で産業開発にともなう深刻な水質汚染が明らかになった。150万人以上の人々の飲用水を提供していた淮河で健康被害、魚等の斃死などの環境汚染が社会問題化し、排水対策を迫る住民運動が繰り広げられた。中国政府が産業排水の排出基準の策定など、国家的な課題として公害防止対策を進めていくきっかけを作った。

韓国、加湿器殺菌剤事件は、韓国企業が販売した加湿器用殺菌剤によって死亡者が出て、2011年に韓国政府の疫学調査と動物実験で健康被害が確認され、使用禁止となった。韓国政府は、加湿器殺菌剤被害申請の受付を2015年12月31日で締め切ったが、その後も環境保健市民センターなどへの被害申告が続いている。2016年４月までに韓国政府と民間組織に申告された被害者は1,848人にのぼり、うち死亡者は266人、被害者は３歳前後の幼児と30歳代の産婦が半数を超えるという特徴がある。韓国政府は社会的惨事特別調査委員会を設置し、被害の全容把握と被害者の救済を検討している。

最後に

２月22日（金）熊本学園大学高橋守雄記念ホール、24日（日）水俣市公民館ホールで、２日間かけて、現状と課題を共有化し、水俣病の教訓を将来にどう活かしていくのかを議論していきたいので、より多くの方の参加を要請したい。

《報 告》

水俣学講義「一人芝居『天の魚』」

俳優　川 島 宏 知

今回の一人芝居「天の魚」の公演は天草に始まり、津和野から再び九州に戻り福岡の大学で終了しました。

熊本学園大学は天草に続く講演でしたが、授業の一環としての公演は初めてのものでした。

舞台は総合芸術だと言われますが、そのような意味合いからも、学生さんたちのご協力の下で舞台設営が出来たことは意義あるものとなりました。

役者とスタッフだけでは舞台というものは成立しません。観客が参加することによって劇場と化し、初めて芝居というものが成立するものなのです。今回の舞台は、学園大学の学生さんたちとの空間を共有することによって成立しました。

2018.11.22水俣学講義での講演
（写真：水俣学研究センター）

私は石牟礼道子という作家の「苦海浄土」という本に出会って、その内容に触れることによって心を揺すぶられるという世界、空間が出来上がりました。もし、この本に出会うことが無かったならば、この大学の舞台には立てなかったでしょうし、このような形で皆様とお会い出来ることもなかったでしょう。

私は子どもの頃から、話し下手、字下手、社交下手と言われ続けていました。その様な性格だったからでしょう。進学のこともあったとは思いますが、中学三年の時に転校、いわゆる越境転学させられました。地元の学校までの距離は数10米にもかかわらず、８キロ米も離れた学校にまでに。

この件は、今までのクラスメイトに対する裏切り行為のようにも感じ、長い間にわたり、心の傷の痛みとなって残りました。それは、上京して演劇学校を卒業し、役者として歩んでいた頃まで続きました。このことは親にも内緒のものでした。

ただ心の中では、いつかこの内気な性格を打破し、自己主張、自己表現しなければ自分の思いを相手に伝えることが出来ないとの思いは持ち続けていました。この思いを抱き続けていた時に、この「苦海浄土」に出会ったのでした。

ひとり芝居「天の魚」の舞台は、この「苦海浄土」の中の１章を、演劇学校での恩師でもある砂田明氏が舞台化したものです。この舞台の誕生には、劇「苦海浄土」という舞台が存在したことを抜きには語れないものがあります。「苦海浄土」が発表された時、砂田氏の発案で、「劇・苦海浄土」が舞台化されたのでした。素人を含めた13人の役者がこの話に乗りました。私もその中の一人でした。

私が使用している仮面はその時に製作されたもので、すでに50年ほどが経過しています。かなり老朽化していますが、当時30種類以上が製作されました。水俣出身の秀嶋由己夫の銅版画をモチーフにしたものです。

東京を皮切りに西日本各地から水俣まで巡演しました。当時は公害問題が大きく取り上げられ、特に水俣病は大きな社会問題として全国に「水俣病を告発する会」が発足しました。その為に、各地での講演後の交流会は大いに盛り上がり、時には言い争いにまで発展することもありました。

舞台上での役者というものは悲しい運命を託されています。恰好良い役もあれば悪役もあり、汚れ役もあります。しかし時には、その役のままのイメージのままに人格が決定づけられてしまうことがあります。それ以上に苦しいことは、現存する人の役をその当人の前で演じることです。この役が私たちに与えられたのです。水銀に侵された患者さんの症状を舞台上で演じなければならないのです。

広島講演を終えていよいよ九州に入ることを意識した瞬間、今までにない恐怖感が私たちを襲ったのでした。その白々しい役を演じなければならないのです。「水俣病はそんなもんじゃない！」「自分たちの企図振戦を真似て・・・！」そのような罵声が返ってくるように感じたのです。九州に入って、私は一人の胎児性患者さんと仲良くなりました。その時、私ひとりだけ悪役（厚生省の役人）を演じていました。

最終公演が水俣公会堂でした。その彼が一番前で観ていました。「なんば言うか！！」と、突然立ち上がるや否や、人差し指を私に突き付けたのでした。その彼を認識した時点で、私の演技は演技で無くなったのです。役から離れたままの裸の自分が舞台上に曝け出されたのです。

この大学での講演も、水俣とはさほど遠くありません。ご家族に被害にあった方がいらっしゃるかも知れません。天草に続き怖いものがありました。

東京での公演のこと。終演後、泣きはらした若い女性が迫ってきました。

「私の親戚にもたくさん出ました！全国でやってください！」「大阪で差別にあい、東京に来ました」と。

《報 告》

第15期公開講座「負の歴史をどう語り継ぐのか ～次世代による負の遺産の伝承とは～」を開催

水俣学研究センター研究員　井 上 ゆかり

第15期公開講座「負の歴史をどう語り継ぐのか～次世代による負の遺産の伝承とは～」を2018年10月２日から30日まで毎週火曜、水俣市公民館第一研修室で開催しました。

今回は、戦争、原爆、水俣などを経験した世代が高齢化し、被害者の多くが亡くなっていく現在、これらの経験、負の歴史を次世代にどう語り継ぐのかが、各地で問題になってきています。負の遺産として、公害や戦争被害の経験や教訓をどのように語り継ぐのかを、各地の取り組みから学び、水俣病被害をどのように次世代に伝えていくかを、水俣市民とともに考えていくことを目的に開催しました。今回の講座には、延べ45名の水俣市民の方々が参加されました。ここでは、５回にわたる講座の内容を紹介させていただきます。

第１回目：「沖縄戦を語り継いでいく具体的な提案～“伝え手”となってもらう平和学習実践～」というテーマで株式会社がちゆんの代表取締役をされている国仲瞬さんに講演してもらいました。糸満市にある平和の礎で「あの崖は戦争を諦めたやつが死んでいった所やろ」と言った修学旅行生が夢中になる能動的な平和学習をつくる取り組みについて具体的な展開例を紹介していただきました。なかでも、資料館を「膨大で貴重な資料が展示してあるのに子どもたちにただ見てきて下さいでは、歩いて終わり」であるため、学生に戦争体験者の「ある個人」について数回にわたり資料館の展示ブースを指定したうえで調べてもらう仕組みが印象的でした。

第２回目：自然観察指導員三重連絡会の事務局長の谷崎仁美さんに「四日市公害から学んだこと。今、私たちにできること」をお話しいただきました。谷崎さん自身が三重県四日市市の塩浜地区で大気汚染を経験しているにもかかわらず公害被害地としての意識が薄かったことから取り組みをはじめたことを明かされました。住民から負の遺産をいつまでも引きずりたくないと言われたこと、環境学習事業を継続することの難しさなど、次世代にどのように橋渡しをしていくかなどの課題も提示していただきました。

第３回目：山口被爆二世の会代表の寺中正樹さんに「被爆二世として生きる」ことの責任について講話していただきました。被爆当時０～５歳だった二世の世代は、被害を受けたものの、被害の記憶がないため家族や語り部の方々と交流し補完している状況を説明されました。そのうえで、被害を伝える者の責任として子どもたちに当事者意識をもってもらえるような３世や４世の伝承役を育成したいと熱く語ってくださいました。

第３回寺中氏の講演（写真：水俣学研究センター）

第４回目：「あおぞら財団の活動と公害経験を伝えること」というテーマで、あおぞら財団理事長で弁護士の村松昭夫さんが、大阪市西淀川区の住民が阪神工業地帯の企業10社と国・旧阪神高速道路公団を相手取っておこした損害賠償請求訴訟の弁護団としての経験、伝えるべき公害経験を財団としてどのように考えているかを述べられました。その取り組みのなかで、村松さんが「伝える手段を技術的なものに集約しても、本当に伝えたいことは伝わらない。迷ったら何のために伝えるのかという原点に戻ることが大事だと思う」と言われたのは、原田正純先生の言葉を思い出す場面でもありました。興味深かったのは、弁護団が門前集会でビラ配りし裁判所に勤務する職員に訴訟の争点を知ってもらう活動をしていた、ということでした。

第５回：水俣芦北公害研究サークル・熊本学園大学水俣学研究センター客員研究員の高木実さんに「水俣病を学び伝えていく～あやまちを繰り返さない主権者となるために～」と題してお話いただきました。水俣病の記述が少ない教材を補うためにサークルで作った資料集『水俣病・授業実践のために』を活用していることや授業展開例など紹介され、学生に「真実を正しく知る力」を養ってもらえるよう、教員が現場に行き納得したうえで接していく意義を語られました。

公開講座へのアンケートでは「伝えることばかりに気をとられていたが教わる学生が伝え手になる取り組みが大事だ」などの意見が寄せられました。これらの意見を今後の公開講座にいかし、水俣学研究センターが地元とともに水俣のこれからを考える場づくりを進めてまいります。

《報 告》

不知火海を船で巡る：多様な漁村と漁業

水俣学研究センター長
（熊本学園大学社会福祉学部）　花 田 昌 宣

今から15年ぐらい前、水俣学研究センターを創設するにあたって５年間で数億円の研究資金に応募した際、調査船を購入して海から漁村を調査しようという計画を立てた。原田正純先生の発案で、焼酎でも飲みながら海の上でのんびりするというものだった。採択されなかったので船を買うことはなかったが、船で回ろうという思いはずっと生きていた。

水俣の市民研究グループのみなまた地域研究会では、ここ数年、水俣の土壌や水質などの重金属汚染の実態について調査し、地域住民の食生活調査も実施してきた。漁業、海辺の暮らしなども調査している。水俣では漁業が不振になったと言われるようになって何年も経つ。よく聞く話は、イワシの水揚げが減った、魚が見えなくなったということで、魚が神隠しにあったという漁師もいた。たしかに漁の水揚げが減っているようだ。その原因は、乱獲、周期的な現象、赤潮など考えられたが、決め手はなく、熊本県の水産試験場の研究者を水俣に招いて研究講演会も開いたが、よくわからない。そこで不知火海沿岸の漁村を巡って漁師さんたちに漁業の話を聞いてみようという企画が持ち上がった。

魚屋の中村雄幸さんが中心となって準備を進め、2018年10月27－28日、「不知火海周遊の調査旅」を行なった。地域研究会のメンバーや熊本学園大学の研究者たちなど10人が参加した。

漁船をチャーターし、２日間かけて、不知火海をめぐった。10月27日８時に水俣丸島漁港を出発し、まずは津奈木、芦北沿岸を北上し、球磨川河口で川辺川ダム建設反対の市民運動をされてきたつる詳子さんから、荒瀬ダム撤去による自然回復の話を伺う。森林の保全と川がもたらす恵みが海を豊かにするとのはなし。

そこから今度は三角旧港に向かう。明治日本の産業革命遺産の一つとして、世界文化遺産に指定されている。三池の石炭の積出港だったというのが産業革命に連なるストーリーだ。八代からは島々の間を抜けていくのだが、浅瀬や岩があるらしく、船長さんは慎重にゆっくりと船を動かし三角港にたどり着いた。その文化遺産の一つ海運倉庫のなかのレストランで昼食。

ゆっくりしてから、大矢野の天草漁協上天草総合支所に。ここには大矢野漁協の嶋本秀司さん、姫戸漁協の山下純二さん、龍ケ岳漁協の北垣潮さんが待っていてくださっていた。

色々話を聞くことができたがとくに面白かったのは大矢野漁協が取り組んでいるハモ漁のこと。全国でも１、２を争う出荷額を誇り、「黄金ハモ」としてブランド化し、主に東京、関西方面に出荷。漁家の所得向上、漁業規模の拡大をもたらし、並んでいる漁船も10トン以上が少なくない。魚場も不知火海一帯で水俣地先もハモが良くとれるとのこと。さらに次の世代も育っており若い漁師も出てきている。その点を漁業センサスで確かめてみると、漁業の新規就業者が芦北、津奈木、水俣ではゼロなのに対して、上天草では23名、うち大矢野が17名いる（2013年漁業センサス）。確実に漁業は育っている。

大矢野漁協で話を聞く（写真：水俣学研究センター）

夕方、宿泊先の御所浦町の横浦島へ。本大学の御所浦調査の定宿の民宿瀬の浦へ。いつものことながら、魚づくし。食べきれないほどの刺身や焼き魚、アワビの刺身が出たかと思えば目の前でエビも焼いてくれる。

翌28日は御所浦島の漁業の拠点嵐口。元支所長の脇島さんに電話で頼んでいたら漁業者が10人ぐらいでてきてくれた。ここでも若い世代がいて、漁の未来は明るいと元気だ。その後、そこから少し船を走らせて獅子島沖でブリ養殖をしている池田さんのいけす網見学。「鰤王」というブランドブリだが、池田さんは餌にも工夫がされていて、他とは違うらしい。中村雄幸さんが仕入れている。その後、長島大陸市場食堂で昼食。人気のお店で小１時間待って鰤王定食。今回の周遊の旅の最後は人口８人の島、桂島。80歳になる森枝さんら一家から桂島の栄枯盛衰を語ってもらい、移住してくれる人には家も船も網もあげるよと勧誘される。現在休校中の小学校分校の庭になっていたバナナの実をいただく。

ブリの養殖（写真：水俣学研究センター）

同じ不知火海沿岸の漁村でも、漁業も多様だし暮らしも生き様も多様。詳しくは別途報告予定です。

《報 告》

新潟大学水俣研修―学生が見た水俣―

新潟大学人文社会科学系　渡 邊　　登

新潟水俣病問題を授業のテーマに据えるようになったのは2012年からですが、水俣市を訪問し、胎児性・小児性の患者の方々、支援者の方々にお話をお聞きするようになったのは2015年からです。

授業で学生に提示したかったことは、まずは新潟水俣病の現実をどう知るか、ということです。実際に水俣病と闘って、闘いながらも未だに水俣病と認定されない多くの方々がいらっしゃるわけです。水俣病問題、そして新潟水俣病問題は、半世紀経っても、未だに解決されない問題です。そして、その現実を踏まえて、水俣病問題に対する自分たちの眼差しの問題、すなわち、自分たちがどのような眼差しを水俣病問題に向けていたのか、あるいは全くその眼差しすら向けていなかったのか、ということを知ってもらいたいと思いました。つまり、自ら眼差しを問い直すということです。そして、自ら眼差しを問い直すことを通じて、自分たちで今、そしてこれから何ができるのか、ということを、考えていってもらいたいということです。

2018年は11月30日から12月２日にかけて水俣市を訪れました。熊本学園大学の田尻雅美先生にコーディネートをお願いして、水俣病患者の方々、支援者の方々にお話をお伺いするとともに関連施設や関係地域を訪ねました。そこで、学生たちは何を考え、何を得たのかを以下にご紹介します。

新潟大学農学部　４年　林 由里絵

水俣の方も世間の関心の薄さや水俣病について話せない雰囲気などに悩んでいらっしゃいましたが、水俣以上に新潟はその問題が深刻であると痛感しました。一方で、置かれた環境が異なっていても引き起こされた苦しみに差異はないことも強く感じました。患者さんやその家族の方々は、原因企業や行政の対応や、周りの人の反応、病と闘う上で起きた家族の変化など、実際の病の苦しみ以外にも多くの辛い経験をされています。事実・経験を後世に伝えていくことの大切さを感じたと共に、その辛い記憶を思い出させてしまうことに葛藤も感じた３日間でした。

人文学部　４年　磯部　航

今回の水俣現地実習を通して実感したことは、「未だに水俣病への不安は解消されていない」ということです。水俣に行くまでは、水俣病と認定された方は、補償を受けることが出来る「救われた」人というイメージを持っていました。しかし実際に、下田さん夫妻にお話を伺ったところ、認定されたらそれで終わりというわけではなく、生きているうちは一生この身体への被害や心の傷に苦しまなくてはならないということを訴えていらっしゃいました。水俣病と認定された人もされていない人も、元の身体に戻ることはなく、治るわけではありません。もう二度とこのような悲劇を起こさぬよう、この実習を通して学んだことを、新潟で多くの人に伝えていきたいと思います。

人文学部　３年　小場 颯希

「水俣病は終わっていない」という言葉には２つの意味があることを、実習を通して学んだ。十分な補償がなく、体も元に戻らないという環境で患者の方は毎日闘い続けているということが１つ目の意味である。２つ目は、水俣病患者に寄り添い、共に闘う支援者がいるという意味である。支援者は大々的に取り上げられることが少なく、事前学習でもこれほど多くの支援者がいることは分からなかった。しかし、この支援者がいたからこそ、水俣病を取り巻く環境が変化してきたのだと考える。しかしながら、まだ水俣病についての理解や認知が十分であるとは言えない。私も実習での経験を活かし、水俣病を正しく伝え、支援者の１人となれるよう努めたい。

人文学部　３年　清水 悠太郎

まだ水俣病で苦しんでいらっしゃる人がおり、水俣病は現在も続いていることを改めて感じました。今も裁判を行っている患者さんもいるという話を聞いて、水俣病は過去の問題ではなく、今もなお苦しんでいる患者さんもいらっしゃることを踏まえるとまだ解決した公害問題とは言えないと思いました。また、継承のあり方について実習を通して一番考えさせられました。若かった患者の会で毎年参加していた人が入院したり、亡くなったりしていることを参加者の方から伺いました。今後、患者さんの貴重な生の声を正確に後世に伝える機会が減っていき、水俣病を始めとする公害問題に対する関心がこれまで以上に薄れてしまうのではないかと思いました。

茂道の漁師さんに話を聞く（写真：水俣学研究センター）

2015年度から水俣学研究センターで受入れている新潟大学の水俣研修について、新潟大学の渡辺教授、受講生に寄稿いただいた。訪問先は、ほっとはうす、遠見の家、水俣病患者さん宅、漁師さん、若かった患者の会、歴史考証館、水俣市立水俣病資料館、エコネットみなまた。ご協力いただいた方々に感謝申し上げます。（田尻）

今後の予定

第３回 環境被害に関する国際フォーラム
―水俣病・失敗の教訓を将来に活かす―

開催日：2019年２月22日（金）
場　所：熊本学園大学14号館高橋守雄記念ホール
（熊本市中央区大江2－5－1）
開催日：２月24日（日）
場　所：水俣市公民館ホール（水俣市浜町2－10－26）
＊詳細が決まりましたら、HPにてご案内いたします。

水俣学研究センター日録

10月

１日	水俣病事件資料集編纂委員会：花田・井上・矢野・高峰・東島（大学）
２日	公開講座１回目：国仲瞬氏（水俣）
３日	水俣学講義打合せ（鴨川氏・中村氏）：井上（水俣）
４日	水俣学講義３回目：藤原良雄氏（大学）
９・10日	公開講座講師谷崎氏水俣案内：田尻・山下（水俣） ZWRT打合せ：藤本（水俣） 公開講座２回目：谷崎仁美氏（水俣）
11日	水俣学講義４回目：井上（大学）
13～14日	胎児性水俣病世代症例検討会：花田・井上・田尻・康・平郡・山口・佐伯・谷（大学）
16日	公開講座３回目：寺中正樹氏（水俣）
17日	公開講座講師寺中氏水俣案内：田尻（水俣）
18日	水俣学講義５回目：鴨川氏・中村氏（大学）
19日	濵付氏行政不服口頭審理傍聴：花田・井上・田尻・下地・山下・伊東・谷（熊本）
20～21日	第47回熊本県人権教育研究大会：花田（20日）・田尻・中路（水俣）
23日	公開講座４回目：村松昭夫氏（水俣）
24日	環境管理論文表彰式：中地（東京）
25日	甲南女子高校研修受入：下地（水俣） 水俣学講義６回目：坂本龍虹氏（大学）
27日	ｅ未来の会対談講演：中地（京都）
27～28日	不知火海調査：花田・井上・田尻・山下・近沢・坂本（不知火海沿岸）
30日	公開講座５回目：高木実氏（水俣）

11月

３日	廃棄物研究委員会：中地（京都） かがやきの森支援学校教員現地案内：井上（水俣）
４～５日	胎児性世代の被害に関するＷＧ：井上・平郡・佐伯・康・谷・山口（大阪）
５日	ZWRT：藤本（水俣）
６日	ダンスセラピスト、フィリップ　シュール氏水俣案内：花田・田尻（水俣）
８日	水俣学講義７回目：田尻（大学）
９日	日吉フミコ氏葬儀：井上・田尻（水俣）
10～11日	ゼロ・ウェイスト推進会議：藤本（福岡） 胎児性世代の被害に関するＷＧ：花田・井上・田尻・平郡・谷・伊東・康・山口・佐伯（水俣）、（大学）
15日	水俣学講義８回目：村田三郎氏（大学）
16日	環境省化管法施行状況検討会・アスベストリスコミＰＪ：中地（東京） 愛媛大学研修受入：田尻・山下（水俣）
17～18日	第12回障害があっても地域で生きる卒後を考える全国集会 in くまもと：田尻（大学）
19～20日	卒後の暮らし関係者水俣案内：田尻（水俣）
20日	化学物質安全管理シンポジウム：中地（東京）
22日	水俣学講義９回目：川島氏・白木氏（大学）
24～25日	胎児性世代の被害に関するＷＧ：井上・谷・平郡・山口・佐伯・康（大阪）
26日	エコネットみなまた総会：花田・田尻（水俣）
28日	水俣病被害者互助会控訴審傍聴・症例検討会：花田・井上・田尻・平郡・山下・谷・伊東・番園（福岡）
29日	水俣学講義10回目：中地（大学） 佐賀大富田先生資料閲覧（水俣）
30日	水俣病被害者互助会義務付け訴訟傍聴・症例検討会：井上・平郡・谷・伊東・山下・番園（熊本） 鳥取大学医学部講演「水俣病と倫理」：花田（鳥取）
30～12月２日	新潟大学水俣研修受入：田尻（水俣）

12月

１～２日	福祉環境論特講水俣現地調査：守弘・矢野（水俣）
６日	水俣学講義11回目：小阪勝弥氏（大学）
９日	科学技術社会論学会セッション報告：中地（成城大学）
10日	水俣病事件資料集編纂委員会：花田・井上・矢野・山本・高峰・東島（大学）
12日	紀伊国屋書店ＤＢ打合せ：花田・井上（大学） 水俣学講義康氏打合せ：花田・中地・井上・田尻（大学）
13日	水俣学講義12回目：康由美氏（大学）
16日	愛林館：宮北（水俣）
17日	水俣学研究編集委員会：萩原・花田・井上・田尻・石坂（大学）
18日	ZWRT：藤本（水俣）
20日	水俣学講義13回目：ＤＶＤ上映（大学）
23日	除染土問題学習会：中地（東京）
26日	アスベストリスコミＰＪ運営会議：中地（東京）
毎週金曜	水俣病研究資料返却と収集：井上（熊本大学）
隔週火曜	健康・医療・福祉相談：下地（水俣）
その他	熊本地震関連講演や研修・視察の受け入れ。災害科研による研究会・調査も行いました。

編集後記

昨年、日吉先生が亡くなられた。力強い存在であった日吉先生。あの世で見守る人たちに恥じぬよう生きていきたい。（M・T）

水俣学通信
第55号　2019.2.1

編　集／熊本学園大学水俣学研究センター　　発行人／花田　昌宣
連絡先／〒862-8680 熊本市中央区大江2-5-1　熊本学園大学水俣学研究センター
Tel：096-364-8913（ダイヤルイン）　Fax：096-364-5320
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/　E-mail:minamata@kumagaku.ac.jp
印　刷／ホープ印刷株式会社